出立の類型

（　超初期作品集　）

Ｍ．　Ｔ．

猫　の　名　は　、　ね　子。

（７月８日のできごと）

じっ子。　つまり　地造　（じぞうではない、　じづくり　と　読むのだ。）　家の　亜呼子（あここ）　は、　日曜日の朝、　まだ半分　眠っているうちに　毛布を　ひっぺがされた。

なによお、　と　寝ぼけた　声で　抗議しても　もう遅い。
亜呼子　の　母さんは　忙しいのだ。

たたきおこされて、　ねこよねこ！　ねこ見にいらっしゃい！　と、
気げんの　いい　母さんに　無理矢理　ひっぱり出された。

……　ヨタ　……　っっっ

猫は　玄関の外で　近所の　ガキ猿　二匹に　つかまっていた。
真っ白？　の　はずなんだけど、　うす汚れて　灰色だった。
頭のてっぺん、　つまり　耳の間だけ　本物の　灰色。
後足が　へんな風で　ふつうに　歩けない。

くる病よ。　　亜呼子の　母さんが　言った。

ねこは　父さんを　抜いた　全員の　賛成により　地造家の　一員となった。
（　父さんには　相談するだけ　むだだ、　というわけで……。）

帰ってきた　父さんは　小屋まで　運んで来た　後だったので
反対の　しようが　なかった。

ねこは　実に　悠然と　食事を　食べていた。

夜、　亜呼子と　弟の　狂多　（くるった）　は　ねこを　お風呂に　入れた。
ねこは、　ねこらしく　暴れないで　大人しく　お湯につかっていた。

へんな　ねこね、　と　亜呼子は　思った。

（　ねこは　ぬれると　すごく　やせて　みえるのだ。）

そして　ねこの　名は　ね子　に　なった。
ね子は　ナーゴ　と　低い声で　鳴いた。

……夜半過ぎ。

宿題を　終えた　亜呼子が　お風呂に　入ろうと　ドアを　あけると　湯ぶねに　大きな　大きな　ねこが　どっぷりと　つかっていた。

そのねこは　ね子では　なかったけれど、　ね子を　そっくり　大きく　したような　やつだった。

大きな　ねこは　ニッと　笑って　かぶっていない　帽子をぬぐと

ふしぎの　始まりは、　いつも　ふしぎで　ない　ことから。

と　言って、　しまっている窓から　飛びだした。

亜呼子は　その晩、　大きな　ねこの　入っていた　お湯で　髪を　洗った。

（青い感じのする所でした。）　（小学生）

青い感じのする所でした。
藍、でも　蒼、　でもない。
静かな青色の世界です。
どこからか　さしてくる　星の光が、　深海にさす陽の光のように、
そこにいる者たちを　まだらに　照らしだしていました。
多勢が、一致した目的もなしに　集まっている　そこには、
扉もなく、　窓もなく、　壁もなく、　ただ非常に高い柱が、見わたす
限りに　並んでいました。

ーーある時、柱の高さを見極めようと　翼のある幾人かが
飛んで行ったことが　ありました。
そして、それきり　その若者たちは　還らず、

その柱が
何を　ささえるものなのか、
今に至るまで　だれ一人として　知ることがありません。

そんな不可思議な柱の間に、　人々は
三々五々と　寄り集まっていました。

神になった人。

大きな手が　彼らを包んでいることに　彼らは　気づかなかった。
ただ　彼らは　彼が　自分たちの　そば　に　いることを　感じた。
暖かさを　感じた。
手は　二人を　包み、　大地を　包み、　星を　包み、
大きさや、　形や、　質量や、
いっさいを　こえた、　手、　となって
宇宙を　包んだ。

ー　彼は、　彼の深淵の　はるか　彼方　から　響いてくる　声を　きいた。
声は　こう　語っていた。
おまえは　神に　なった、　と。
だが　神も、　さらに　大いなる
神々の　人に　過ぎない。
今、　おまえは　一つを　為し、
さらに　大きな　一つの　途（みち）の
始めの　一歩を　踏んだのだ。

彼は　開かれた　門に　立ち、
新たな　光と　世界を　見た。

神話。

神話や昔話に形容詞が少ないのは、
あとから消えたのではなくて、
「書けない」、
または 「書くだけムダ」 な事を
知っていた　から。

人々は　かの女神　が　動くにつれ
光を放つように見、
音を聞いたように思い、
女神の持つ　“何か”　を
知らぬうちに　感じ取った。

道において　すれちがい、
言葉を　交わし、
触れることも
見降ろすことも
自由にできた。

常人と
なにも　変わること　なく
女神は　暮らした。

それでも
人々は　彼女が
神々しく　力有る者
なることを　かいま見た。

すいません。
『春まだき』（６）と同上です。
（＾＾；）
すっかり忘れていた作業未完のファイルですが、
棄ておくのもあれなので晒します～ｗｗｗ

2015.09.25.

出立の類型

http://p.booklog.jp/book/21061

著者：土岐　真扉
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/21061

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/21061

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ